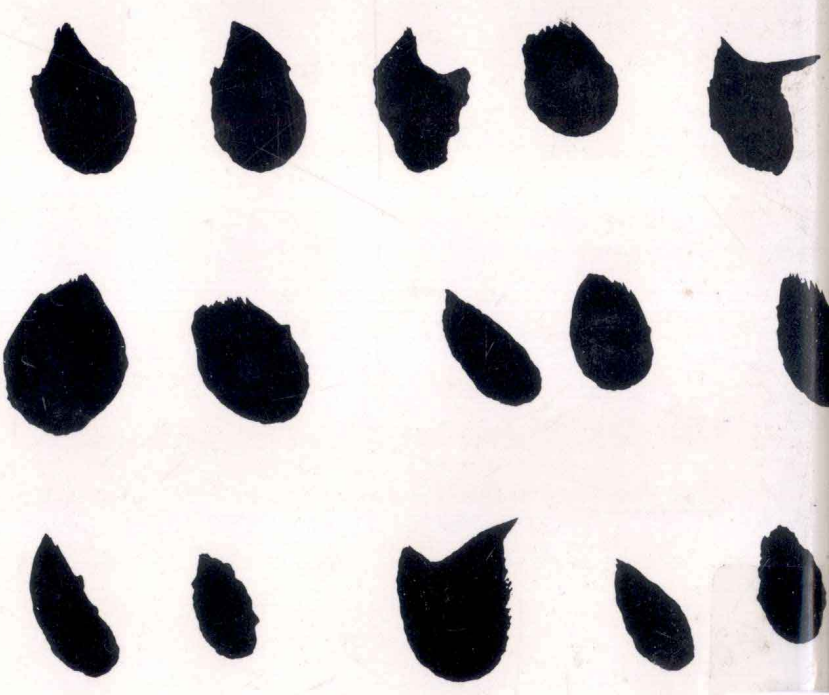
# 石を聴く

宇佐見英治



# 石を聴く

宇佐見英治

朝日新聞社

宇佐見英治　うさみえいじ

1918年大阪市生まれ。現在，明治大学教授。〈著書〉『ピエールはどこにいる』（東京創元社，1956）『縄文の幻想』（淡交社，1974）『秋の眼』（湯川書房，1974）『迷路の奥』（みすず書房，1975）他。〈訳書〉リード『イコンとイデア』サン・テグジュペリ『手帖』（みすず書房，1957，1963）バシュラール『空と夢』（法政大学出版局，1968）他。

**石を聴く**

著者／宇佐見英治

昭和53年12月15日発行

発行者／藤田雄三

印刷所／共同印刷

発行所　東京 大阪　名古屋 北九州　朝日新聞社

¥ 1200

© EIJI USAMI 1978

0095-254621-0042

# 石を聴く　目次

石切場にて　7
殺生石　21
雲と石——宮澤賢治のこと　33
アラジンの果実　51
石垣町　63
足音　77
太陽と月の庭　87
西の河原　95
五輪塔　109
芭蕉の二句をめぐって　121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

青金幻想　135
雪舟とセザンヌ　147
石塔寺ほか　159
石を踏む　171
毛越寺逍遙　183
一乗谷朝倉氏館遺蹟　197
星宿石林　213
砂の影　227
岩と陰翳——遠州と潤一郎の墓　237
海の塚　249

裝幀　李禹煥

# 石を聴く

Je suis belle, ô mortels ! comme un rêve de pierre

われは美し、あわれ、現身(うつしみ)よ、石の夢の如く

——ボオドレール——

# 石切場にて

車が東海道線のガードをくぐり、谷あいを少しのぼると、もう急に山ふところに入った感じがする。いまにも石切場の音がきこえてきそうだ。そんな山気がするのは一車輛幅の道が明るくなった草をわけ、ところどころにひるがえった泥土が見えてくるからである。左方に疎林が見えた。その向うの暗がりを清水川の渓流が地をうがって流れている。車は右方の崖ぶちにそってどんどんのぼってゆく。尾根が近いのか遠いのか、山肌しか見えない。

つい数十分前、A君と私は小田原から車を飛ばして相模湾を左に見ながら海ぎわの国道を走っていた。あの道はほとんどカーブもなく真鶴、熱海に向って走っているが、早川をすぎるとまもなく箱根外輪山の熔岩台地が崖となって右肩に迫ってくる。いまわれわれがあとにしてきた米神(こめかみ)の聚落は早川から三キロ、この谷が海に入るわずかな窪地にある。

ここは東海道線で来ると、小田原から三つめの短いトンネルをぬけたあたりである。しかし石に興味のない人は海や蜜柑畑に心を奪われて、この山に採石場が点々とあることなど気にもとめないであろう。思いちがいでなければ、つい十数年前まで根府川(ねぶかわ)駅の構内には採石された石がいつも堆(うずたか)く積まれていたものだ。それがこの駅に海の崖上にあるという以外に独特な風情を添え



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ていた。実をいうと、二十五、六年前、私はそんな景趣に誘われて或るときふっと根府川駅で下りたことがある。もっともそのころは石に格別関心もなかったから、足のむくまま急坂を下り、松が十数本海ぎわに生えているのに目をとめて、荒磯の石に腰を下し、しばらく海を眺めていたのだった。私は当時根府川石のことをよく知らなかった。私はまた鷗外が「沙羅の木」という詩に次のような句を書きとめていることをも知らなかった。

褐色(かちいろ)の根府川(ねぶかわ)石(いし)に
白き花はたと落ちたり、
ありとしも青葉がくれに
見えざりしさらの木の花。

根府川熔岩とよばれるこの石の肌は飴をのばしたような赤褐色をしている。その色と堅さが若葉や沙羅の木の花とまことによく映りあう。そういうことを私がじっさいに知ったのは、つい昨今のことだ。

さきごろ、石について何がしかのことを書こうと思っているうち、ふっとこの根府川のことが頭に浮んだ。私は淡交社のA君に頼んで、根府川石の採石場を案内してもらえるよう、石工棟梁

の南里隆氏に連絡してもらった。その日A君と私は朝早く東京を発った。われわれはまず米神の崖上、鉄道線路のまぢかにある南里さんの宅を訪ねた。それからわれわれは山に向った。

採石場の台上に車から降り立ったときの強烈な印象。私は以前にもその後にもいくつか石切場を見たが、この景観の壮麗さに及ぶものはない。背後には肌をむき出しにした巨大な岩層が遠くまでつづいている。その前の水平に切り均らした台上はさながら宗教劇のために作られた舞台のようだ。ここではそれこそほんものの星や岩、木の精や海や人間がいまも行われつつある天地創造の業に加わり、この瞬間にもそれらのものが風の中で叙唱（レシタティーブ）を歌いかわしているようだ。丁場は北に奥深く岩層を負い、南は下方、海に向ってひらけている。晩春、正午（まひる）にちかい空は冷たく流れ、陽を見失った羊の群れのように雲がおぼつかなく寄りあっている。さっき車で山道を登ってきたときには海からずいぶん離れたように思ったのに、この台上ではかえって海が間近に迫って感じられる。

私は天のライトに照らし出された高い背後の岩層を眼で追った。岩壁は広大で一望におさまらず、或る区域は削りとられた露頭がもはやもとの山体に帰っている。或るところは削られてまだ数年とたたず、岩ははじめて地上の光を浴びたときの感動をいまも幽（かす）かに反芻しているようだ。やや右の奥まったところに目下採石中の岩層がある。そこはさしずめこの舞台の大祭壇といったところである。下方には根府川石に独特の板状節理をもった褐色の岩体が幾千となく積みかさな

り、それはさながらまちまちの周縁をもった紫檀の花台を幾重にも積み上げたというふうだ。防災帽をかぶった一人の石工が、岩盤の上で、梃子を使って岩をへぎ落している。その光景は岩の節理の神秘をわきまえなければ、不可能事を終日している人のように見える。岩層の下方は岩が板状に重なっているが、上層は脈がみだれて岩板が或いは斜め、或いは垂直にせめぎあっている。或るものはへぎ落された面（中身）を、或るものは未だ落されぬ肌（表面）をかかげあって、いまにも踊り出ようとするかのようだ。飴色のむらむらとした岩肌にまじった青灰色の岩の中身、それが薄陽に照りあう光景は、岩石の精が魚となって天上を跳びはねる勢いを感じさせる。

五、六人の石工があちこちの岩上に散らばっているが、それが非常に小さく見える。ここでは岩の轟き、地上の光を初めて浴びた岩の喚声が音なくこだまして、そのダイナミックな静寂に岩を割る玄翁の音やシャベルの音が吸いとられてしまうというふうだ。

広い台地には選別された石があちこちに集められている。建材や化粧板になる薄板は薪を組むように積みあげられ、或る位置には庭石になる重い岩塊が、また或るところには碑石用の広い板石が寄せられている。これらの石はいずれも板状をなして、数センチの薄いものから厚さ数十センチに及ぶものがある。肌はねっとり焼きあげたような赤褐色をしているが、それは成分に磁鉄鉱がふくまれているからだ。しかし面（中身）は無数の粒子が堅くつまった青味がかった灰色で、この手のものを青手、葦がかった灰色のものを小豆手という。

南里さんによると、この丁場は左右百八十メートルあるという。一年に採石しうるのはたかだか幅三メートルだから、まだまだ採りつくせない。

南里さんとわれわれはふたたび車に乗って清水川の谷を下った。同氏によれば根府川石はこの谷と一つ向うの谷、白糸川の間の山でしか採れない。同じ西湘でもその向う、真鶴、岩村、吉浜では本小松石か新小松石しか採れないという。

その日の午後、われわれは真鶴にゆき、同地の青木輝良氏を訪ねた。それから同氏の案内で岩村の採石場にのぼった。この石切場は真鶴駅の背後の坂を車で数分のぼった山内にある。あたりを小松山という。その一帯、さらに奥の山あいには石切場がいくつか点在している。ここから採れる石を本小松石というが、この石は根府川石と並ぶ良質安山岩で初期箱根火山の噴出によって出来た堅石（かたいし）である。本小松石は石質が緻密堅牢で、磨きあげたものにはしっとりとした気品がある。東京近辺で青みがかった灰色の目だって艶々した墓石や碑石をみかけたら、まずこの石だと思ってよい。

石切場には――といって私はそう多く見たわけではないが――それぞれ独得の気配がある。この気配は岩に貫入する人間の労働の臭いやまわりの地勢、それぞれの岩石の石理や石質、成分鉱物の粗密や色沢、いわば石の眼ざしと人間の体熱が溶けあったものだ。

青木さんの話によると、小松石の採石の歴史は古く奈良朝に遡る。先年岐阜県養老郡の龍淵寺から千二百年前（奈良時代）の相州産小松石が発見されたが、これは成分分析によっても科学的に確証せられた。（この話は同氏からもらった『日本石材工業史』にも記されている。）してみれば、当地は日本でもっとも早くからひらけた石切場のひとつだということになる。近くに積み出しの良港をもつこととこの岩が安定した良質岩であることから、小松石は北条氏の小田原城や徳川の江戸城構築にもっぱら用いられた。また鎌倉あたりでみかける宝篋印塔や多宝塔もほとんどこの石でできている。そんなことから江戸時代を通じて、ここは幕府官営の「御用丁場」であった。

そうした土地柄のせいか――何もこの現場は何百年も掘りつづけられた場所ではないが、――この丁場に立ってみると、地面にも削られた岩層にも歴史の生臭い匂いがこびりついているように思われる。丁場の右の境界には石の粉をかぶって数本の木立が立ちならび、草が剃りのこされた鬚のようにもじゃもじゃ灰色に干涸びている。ここでは石工が鑿岩機をうならせていた。もしファン・ゴッホがここにいたなら、地中の岩石に挑みかかる労働の膏がにじんだこの石工を好んで描いたろうと思う。この石切場は岩壁を二段に、つまり手前の下方も掘り深められている。摺鉢のようになった底の一部には湿った粘土と小さな水溜りが見られた。

そういえば、さっき根府川石の丁場から米神へ下りかけた車中、日かげりの林中で、セザンヌの或る絵にそっくりな光景を見かけたことを思い出す。それは「石臼のある森」という絵で樹林

の中に長方形の切石がむきむきに散らばっている風景である。樹かげに置き去られた切石の堅さとしなやかな木立を車窓から見た瞬間、私はその絵のためかどこかで見たような懐かしさをおぼえたものだ。セザンヌは非情な眼で見えるものを受けとめ、見えるものに対するおのが《感覚》をもっぱら実現しようと努めた。石の堅さや形体、またそれがただそこにあるということ以外には何ごとをも語らぬ岩の存在はセザンヌの眼を殊にひきつけた。もしセザンヌがこの丁場を見たとしたら、彼は石工ではなく、眼前に切り出されて転がされている岩塊に食いいるような眼差をそそいだにちがいない。セザンヌは切石や粗岩のある場景を幾点か描いた。ちょうどいま私が見ているような石切場の岩壁をもっぱら描いた絵もある。

真鶴半島は真鶴駅のあたりを基部として海中にのびた小さな半島である。それは同じ富士火山帯に属する伊豆半島をちょうど小型にしたようなもので、狭いながらも全体がリアス式海岸でできており、ところどころにやや大きな湾やこぢんまりとした入江がある。この岬のような半島は、これまで見てきた海崖上の山地と同様、初期箱根火山の噴出によってできたものだ。半島全体が熔岩台地でできていて、その上に繁った樟や椎の大木が鬱蒼と半島を蔽うている。

私はこの地が何となく好きで、これまで用もないのに東の丘陵地帯を散歩したり、また坂を下って、汽車の窓からはよく見えないすぐ下の漁港を見に行ったりした。近年も伊豆、湯河原の遊



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com